

令和6年度 江戸川区立第七葛西小学校 学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	児童一人一人に真の「生き抜く力」を育む教育を目指し、「学力向上」「豊かな道徳心」「体力の向上」を焦点化し、次の4点を目標として設定する。 ・考える子 ◎思いやりのある子 ○じょうぶな子 ○やり抜く子	目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	○3つの「がい（学びがい、働きがい、通わせがい）」のある学校 ○礼儀、責任、感謝の気持ちをもつ児童 ○プロ意識をもち、指導力向上に励む教師
前年度までの本校の現状	成果 ・児童の表現力の向上を目指して、外国語を中心とした授業力向上に取り組んだ。その結果、全学級でICTを活用したり英語で会話したりする授業展開ができたようになった。 ・定期的に生活指導タテや特別支援校内委員会等を実施するようになり、不登校対応、特別支援対象児童等の対応を組織的にできた。 ・若手研修、OJTを計画的に行い、若手教員の育成を推進できた。	課題	・CD層の基礎的な学力向上が課題。 ・不登校児童、特別支援対象児童の対応が課題。 ・日本語を理解できない児童、保護者の増加が課題。

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己（学校）評価（A～D）		「中間」学校関係者評価（A～D）		「年度末」自己（学校）評価（A～D）		「年度末」学校関係者評価（A～D）		次年度に向けた改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力の向上	○授業改善の推進、学習の基礎となる基礎・基本の確実な習得	・朝学習時間、休み時間を活用した反復練習の実施 ・区学力定着度調査、CDTテストの活用 ・UDL化した問題解決学習をテーマにした教育課題実践推進校の実践	・朝学習の合計実施回数100回、全学年での反復練習機会設定 ・C層児童10%をB層へアップ ・児童アンケートで70%の児童が分かるとう回答	B	A	A	・朝学習は短時間であるが、静かに各学級課題に取り組んでいる。問題解決型の4過程の学習を全学級で実施するようになった。 ・C層児童のB層へのアップはまだ途中。 ・児童アンケートは2学期以降に予定。	B	・放課後学習教室、など、努力は認めるが成果としてまだ表れていない。 ・問題解決型4過程の授業形態は定着してきた。	A	・漢字50問テスト、朝学習などの活用で、反復練習が充実した。 ・全国学力調査では、国語、算数とも全国平均を上回ることができた。 ・区の教育課題実践推進校の発表会を実施できた。	A	・区の学力テストを滞りなく実施し、その分析と改善をすべく努力を続けている。 ・区の研究発表会を受け、UDL化した問題解決型の学習を推進した。	・問題解決型の学習と反復練習を目的とした独自の学習教室を実施し、CD層のさらなるレベルアップを図る。
	○家庭学習習慣育成のための組織的な取組の実施	・放課後補習教室の実施と内容の検討 ・夏季学習教室の実施 ・ミライシードの日常的な活用	・放課後補習を合計150回実施 ・夏季学習教室への各学年30%参加 ・全学級での毎日実施	B	A	B	・放課後補習教室、夏季学習教室は予定通り実施したが、対象児童の参加率が低い。 ・ミライシードの活用は全学級で日常的に行っている。	A	・放課後補習、夏季学習教室を計画通り実施した。 ・ミライシードの日常的な活用ができています。	B	・補習教室、学習教室の実施は計画通りであったが、対象児童の参加率に課題があった。	B	・授業時間外の時間も利用して、基礎基本を身に付けるように工夫と努力をしている。	・放課後補習の児童の選定方法、内容の充実化を図る。 ・保護者会、各種たよりなどにより、家庭の学習に対する意識を高める。
	○読書科の更なる充実	・蔵書管理システムの運用促進 ・司書や図書ボランティアとの連携の充実 ・読書を通じた探求的な学習の推進	・児童一人の貸出数を年間50冊以上 ・年4回の読み聞かせ会の実施 ・夏の読書コンクールへの児童70%で応募	A	A	A	・児童一人の貸出数は平均すると20冊程度に留まっている。今後目標値を示すことで改善させる。 ・調べる学習コンクールへの児童応募は、3年生以上で実施。95%以上が提出した。	A	・図書ボランティアの活動が活発で、図書館整理や読み聞かせ活動を日常的に行っていた。 ・調べ学習コンクールで金賞受賞者が出るなど、参加数だけでなく質も良い。	A	・蔵書管理システムの更新が滞りなくできた。 ・司書や図書ボランティアとよく連携して運営できた。 ・調べる学習コンクールの参加が定着した。	A	・蔵書管理システム運営が滞りなく行われている。 ・図書ボランティアによる読み聞かせや、新潟県鶴岡市から蔵書提供を受けるなど、児童の読書への関心を広げている。	・蔵書管理のデータを分析し、児童の読書量や読書傾向を把握し、児童の読書への興味や関心をさらに広げる。
体力の向上	○日常的な健康の推進に向けた取組の実施、改善、充実	・なわとびweekの実施 ・全校歯磨き週間の設定 ・マラソン週間の実施	・各学期2週間実施 ・各学期1回ずつ設定 ・年間2回実施	B	B	B	・なわとびweekを計画したが、熱中症アラートのため、実現できない日が多かった。 ・歯磨きWeekは全校で学級を決めて実施したが、参加していない児童もいた。	B	・なわとび出前授業、マラソン週間などを実施し、体力向上に努めていた。 ・体力テストが芳しくなかった。	B	・全校運動遊び、なわとび大会、マラソン週間など基礎体力向上に努めているが、体力テスト結果は、握力、跳躍力を中心に低かった。	B	・校庭改修後の柔らかかった地盤が固まり、水はけもよくなった。WBGT制限に注意しながら、運動機会を増やす。	・校庭改修後の柔らかかった地盤が固まり、水はけもよくなった。WBGT制限に注意しながら、運動機会を増やす。
	○運動意欲の向上に向けた取組の実施	・縄跳び大会の実施 ・外部講師による各種オリパラ特別授業の開催	・年間2回実施 ・全学年1回以上実施	A	A	B	・カヌー教室やポッチャ体験など、各種オリパラ特別授業を実施。2学期以降も計画。	A	・各学年1つ以上の運動関係の特別授業を実施し、児童の運動への関心を高めるよう努力した。	A	・カヌー体験、走る特別授業、スケート教室などを実施し、児童の運動への関心を高めることができた。	A	・特別授業を計画的に実施できるように進めていた。運動を始めるきっかけを増やしていくとよい。	・次年度も運動に関係する特別授業を行い、児童の運動への関心を高める。
教育の推進 共生社会の実現に向けた	○ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の実施・充実	・校内委員会の開催 ・個に応じた日本語指導支援の強化 ・巡回指導教員等による特別支援研修会の開催	・定例会を月1回（年間10回）開催 ・毎週1回、巡回指導教員とコーディネータ、担任との打ち合わせを実施 ・年間2回実施	B	A	B	・校内委員会を計画的に実施している。校内判定委員会に必要な書類を確実に揃え、特別支援対象児童を把握している。 ・巡回指導への入級、日本語指導の手配を、即時対応している。 ・5月に巡回指導委員による特別支援研修会を実施した。12月に2回目を予定している。	A	・特別支援教室（巡回指導）への入級対応が早期にスムーズに行われている。	A	・日本語指導教員の手配や変更がスムーズに行えた。 ・校内委員会を計画的に実施し、適切に判定会を行えた。	A	・教員研修会2回を実施し、対応力向上に努めていた。 ・校内のUDLを進め、授業環境の改善を行った。	・SC、SSWとの連携を密にすることで、不登校児童への対応を充実させる。
	○エンカレッジルームの活用促進	・エンカレッジ担当教員のシフト化の実施	・5月までに体制作成	A	A	A	・エンカレッジ対応表を作成し、教室待機している。	A	・教室を出てしまう児童への対応を行い、減らすことができた。	A	・本校の職員は職員室待機して仕事をすることが習慣化できた。	A	・エンカレッジ対応の教員だけでなく、全ての教職員が機敏に対応する様子が見られた。	・教科選択制に向けて、エンカレッジ担当教員体制を早期から検討し、対応が可能にする。
	○副籍交流の実施・充実	・副籍交流対象児童数の促進と内容の充実	・文書交流の月1回	B	B	B	・復籍交流は行っているが、文書交流のみに留まっている。	B	・復籍交流の様子や成果が分からない。	B	・文書交流に留まっている。交流内容が広がらないが、時間的な面、安全面で実施に至らなかった。	B	・交流は障害者理解に必要なことだが、実現の難しさも理解できる。	・次年度も復籍交流の件数、交流内容の拡張を検討し、インクルーシブ教育に努める。
不登校・充いめ対応の	○豊かな心の育成	・いじめ防止対策委員会の開催 ・異学年交流の充実 ・道徳授業地区公開講座の実施と内容の充実	・対象児童の確認次第、即日に開催 ・いじめ防止に関する授業を全学級で実施、講師による特別授業を実施	A	A	A	・臨時のいじめ防止対策委員会を3回実施した。即時対応している。 ・金子みすゞ記念館館長、矢崎節夫先生による道徳授業と講演を実施した。	A	・管理職、生活指導主任も加わり、組織的に対応していた。 ・道徳授業公開講座でいじめ防止の授業が行われていた。	A	・いじめ防止対策委員会を臨機応変に実施し、即時対応できた。 ・たてわり班活動を計画的に行い、異学年交流ができた。	A	・いじめ防止アンケートを年3回行い、聞き取りも確実に実施され、未然防止、早期解決に努めていた。	・道徳授業力向上と定期的な研修によって、教職員のいじめについての理解と対応を維持できるように努める。
	○不登校対策の実施・充実	・SC、SSWとの連携強化 ・不登校対策委員会の設置	・不登校児童のSC、SSWとの連携率100%	A	A	A	・不登校児童、家庭状況課題児童、リストカット児童と、多岐にわたり、SCやSSWと連携して取り組めた。特にSSWとの連携を強化することができ、1週間に1程度ずつ連絡を取っている。	A	・区の指示を確認しながら、管理職が積極的に対応に当たり、組織的に対応していた。	A	・葛西学習サポート教室と連携して、不登校児童対応を2件行った。	B	・事情は様々だが、現在不登校児童が4名いる。	・SC、SSW、教育相談室と連携し、本人の意思を尊重する形でこころをケアし、改善に取り組む。
	○教育相談の強化	・hyper・QUによる実態把握と教職員の情報共有 ・教育相談の充実	・7月に実施、8月に校内研修会で情報共有 ・5月までにスケジュール管理のシステム化	A	A	A	・9月にhyper・QUの校内研修を行って、対応方法のビデオを学年ごとに鑑賞し、学校全体で情報共有も行った。 ・SCによる教育相談を計画的に行った。区の発達相談室（なないろ）との連携も2件行った。	A	・全校朝会や学級活動を活用して、校長講話やアンケート実施などで、日常的に未然防止に取り組んでいた。	A	・10月に人権研修会、12月に生活指導研修会を実施し、教員の生活指導力向上を図った。	A	・SSWや児童相談所との連携が昨年度より密に行われていた。	・普段より関係諸機関と連携を深めておき、即時対応がスムーズに行える状態を作る。
学校（園）地域社会に開かれたの実現	○学校（園）ホームページの充実等	・ホームページによる情報発信の更なる推進	・毎日更新 ・行事ごとに特設記事をUP	A	A	A	・ほぼ毎日更新している。学年ごとに、行事について特設記事をUPしている。	A	・PTAのがくぶりによる広報活動が素晴らしい。	A	・給食献立や行事だけでなく、学級での取り組みも即日UPできた。	A	・広報活動全般的に充実度が高まった。現状維持に努める。	・ホームページ操作技術を高めた。現状維持に努める。
	○学校（園）公開の実施・充実	・学校だより、学年だよりの発行と内容の充実 ・学校公開、学校説明会の実施 ・学校関係者評価の充実	・回覧システムによる内容の改善と月1回の発行 ・年3回の学校公開 ・各学期1回の見直しの実施	A	A	A	・回覧システムより、組織的に対応する体制ができています。 ・4月と6月に学校公開を実施した。約8割の児童の保護者が来校した。いくつか厳しい指摘もあったが、概ね好評だった。	A	・tetoruiによる連絡配信がスムーズだった。不審者情報や移動教室の連絡など、割合こまめな連絡が即日に行われていた。	A	・回覧システムと校長の最終確認により、ミスなく発信できた。 ・学校評価を計画的に進め、教務中心に分析を行い、改善策を考えることができた。	A	・学校評価は約90%の回収率だった。広く保護者の意見を求め、対応策を考えていた。	・学校公開の見どころを示したり、学校説明会でICT危機を活用したりして、学校の特色を伝え、情報発信に努める。
	○地域人材発掘・PTA行事への参画	・地域人材の活用促進 ・PTA行事への教職員参加の促進	・学校応援団の活用 ・教員一人2回ずつの参加を徹底	B	B	B	・学校応援団を担った方々が高齢となり、人材発掘が必要。 ・5月の新田フェスティバルには教員16名が参加した。地域のラジオ体操にも10名参加と昨年より促進している。	B	・人材確保の見通しがもてていない。 ・教職員の参加が増えた。	B	・人材確保ができていない。 ・PTA行事への年2回の教員参加はほぼ100%達成した。	B	・人材確保する体制づくりがまだできていない。地域への働きかけを充実させる必要がある。 ・教員の手を煩わすボランティアは避けていくべき。	・PTA行事や学校応援団の事業に教職員も参加することで、地域や保護者と教職員の交流の機会を増やし、地域との連携を深める。
教育の特色ある展開	○働き方改革の推進	・行事や会議の精選 ・育児や介護への配慮の実行 ・定時退勤日の設定と実施	・全教職員の月残業時間45時間以下 ・毎週水曜日の残業者0の実現	B	B	B	・会議や行事の精選は、教務中心に検討をし、削減を進めている。最終退勤時刻が早まり、20時にほぼ全員が退勤できた。月残業時間45時間以上の教員も成績処理月だった6月の7名を除きほぼ0である。	B	・会議の精選を実現した。 ・全体的に勤務時間は削減しているが、一部の教員が依然として残っている。	A	・会議時間削減、定時退勤日実施、校務支援システム活用ができた。 ・時間外勤務時間を月45時間超える教員は1、2名に減らせた。	B	・偏りはまだあるが、教職員の働き方改革を進めていた。	・仕事内容のマニュアルを進めて、若手教員への引継ぎが確実にできるようにする。
	○若手教員の育成	・日常的なOJTの実施 ・若手研修会の開催	・ベテランと若手のペア8割実施 ・毎週月曜日開催	A	A	A	・職員室で作業をする教員が多く、同じ校務分掌担当同士が活発に話し合いを行って作業を進めている。経験者が助言しながら協働で作業し、OJTとなっている。 ・毎週月曜日に若手研修会を実施。若手育成に貢献している。	A	・計画的に組織的にOJT、若手研修が行われていた。	A	・若手を中心に人材育成を計画的に行うことができた。	A	・教職員の資質向上が日々の取り組みから見て取れた。	・職員による仕事量の調整、適材適所配置を行い、全教職員の定時退勤をできるようにする。